

第一章 二十四年間の思索生活

一 文明社会進化の法則について

私は、肝臓を悪くして昭和四十四年の一月から四月まで国立仙台病院に入院していたが、その時、学生時代から考えてきた哲学的思考の一端を「文明社会進化の法則について」という論文にまとめて、各界の代表の方々に参考にしてもらいたく、また、ご批判を仰ぎたく送った。

送った主な方々の名前を列記してみると、佐藤元首相、福田元大蔵大臣ほか当時の全閣僚、各党委員長、著名諸科学者、諸評論家、諸作家、報道諸機関、各国大使館等であったが、全部で百人を越えた。そのうち、一橋大学の都留重人先生、桐朋学園大学の北沢方邦先生を加えた十数人の方々から極めて貴重なご意見、ご批評をいただいた。それから六年たった今日(この間、本格的な思索研究をしてきた)、それを再び読み返してみると、思考の未熟さと飛躍は感じられるが、基本的な認識における誤りはほとんど感じられない。参考にその論文を掲載するので、先ずそれを読んでもらいたい。

私は、昭和二十七年から三十一年までの四年間、東北学院大学で経済学を学びましたが、その間、高校時代にふと感じた疑問を深く掘り下げて研究していたところ、動物に共通してある根源的欲望の食欲と性欲が、人間社会においても人口増加を生じさせ、その人口増加が人間社会を進化させる原動力となっていることに気づきました。そして、この見方をおし進めていくと、人間社会の過去、現在、未来の進化の過程がすべて分り、この見方が社会科学の進歩に大きく役立つことも知りました。一月初旬より肝臓を悪くして国立仙台病院に入院しているうち、一月十四日の読売新聞に掲載された立命館大学の梅原猛先生の「欲望学の提唱」という記事に刺激されて、また暇だったこともあり、そのことを論文にまとめてみることにしました。現代は人間疎外の時代とか人間性喪失の時代とかと言われ、文明の危機が叫ばれていますが、これは自然科学の発達之余にも素晴らしく、物質、機械化文明がマンモス化しているのに対して、人間側の科学である精神科学とも言われる社会科学の発達が遅れ、その物質、機械化文明をコントロールする力を失っているところから

きていると思われます。したがって、社会科学の発達を急ぎ、そのコントロールする力を回復しなければならないと思います。およそ自然科学にせよ社会科学にせよ、科学と言うからには、最も基本的な法則のキャッチから始まらなければならないと思います。社会科学の基本的法則を求めるのに、私は人間社会の最も古い形態である原始社会における人間の姿、生活の様式等から考えました。原始社会の特徴は、小単位の移動的な社会が各地に点在していたこと、その頃の人間は他の動物と同様で本能的で欲望も知恵も感情も単純であったこと、彼らは食糧として自然の草木の芽や実、それに動物を捕って食べて生活していたこと等があげられます。上記のような特徴からいって、人間は他の動物と余り変わりなかったのですが、それなのに他の動物社会に別れをつけて、それが幸か不幸かは別として、何千年かの間に偉大な文明社会を築いた原因は、人口過剰的要因と頭脳の発達にあります。動物はすべて根源的な欲望として食欲と性欲とをもっています。人間もその例外ではありません。原始時代の人間はその欲望をまる出しにしての生活であったと思われます。しかし他の動物とちょっと違うところは潜在的な能力として考える力をもっていたことです。本能的な生活において、食欲が満たされれば性欲もまた満たされ、そこに人口の増加が考えられます。人口が増加すれば、それだけ食糧が必要となってきた、徐々に限られた自然の食糧に対して人口過剰現象が起こってきます。それを解決するために原始人たちは、社会を蜂の分封のように分封すると同時に自然採集や狩猟の範囲を広げていきますが、やがて他の小単位の社会とも接触するほどとなり、食糧確保の範囲の拡張に限界を感じざるを得なくなります。

食糧の不足は飢餓を招き、種族の存命に関わる問題ですから、原始人たちは必然的に潜在的な思考力をフルに働かして、自然の法則を応用して食糧の生産に必死にとりかかったと思われます。動機はそのようにしてですが、この考える力によって農耕や牧畜を始め得たことが文明の第一歩であったと思われます。すなわち、人類にだけ与えられたこの考える力によって、この時、他の動物社会に別れをつけて人類は今日の高度文明社会の最も初期的段階を迎えたと思われます。したがって今日の諸学問、諸文化等の最も原始的な起源もそこにあると言っても間違いではないと思います。食糧が満たされれば人口もまた増加し、それに比例して食糧の生産が必要にたり、シーソーゲーム的に経済の成長、社会の進化が必然性をもって際限なく続くこととなります。そして人間の頭脳は使えば使うほど発達するようになり、その頭脳が食糧の生産性を高めたことは勿論、多様化する欲望を充たすための産業も起こしました。他方、社会は自己拡大すると同時に、他の小単位の社会とも土

地確保の必要性、バスター制、戦争、奴隷確保等の必要性等から接触し拡大することともなり、社会の規模は拡大の一途を辿ります。そこには徐々に強大な政治力、綿密な法制化、秩序化、計画化等の必要性が生じてくるのは当然であります。更に天文学、農学、数学、科学、その他諸学の専門的知識が無限に要求されるようになりますが、また、ゆとりある生活からは人間の情緒性に関連して芸術も生まれます。それらがすべて発展の基礎となり、関連して文明社会を進化させる力となるため、文明社会の進化に加速度性がつきます。一度、文明社会が原始社会から脱皮して進化の勢いにのると、種々の変化が起きます。それらは法則性があり、把握し易いものなので三つに分けて説明します。

人間側の変化 その第一は、社会の進化が進み、各種の生活資材、飲食物等の生産が行なわれたり、諸文化、諸芸術が起こってくると、それに併行して各種の欲望もまた起こり、欲望の多様化がますます進みます。第二は、単純な社会の段階では割合に法制化、秩序化、計画化が厳しくないため、人間は半ば自由でしたが、人口が多くなり社会が進化すればするほど厳しい法制化、秩序化、計画化等の必要に迫られ、文明が進化した社会の人間ほど厳しい拘束力をもつ体制の下で生活しなければならない運命におかれるようになります。厳しくなければ複雑化した多くの人間の住む社会の運営が出来なくなるからです。

文明の変化 その第一は、文明社会が人口増加により必然性をもって進化する限り、その進化のテンポに“法華の太鼓”的な加速度性がついてきます。日本の場合を例にとると、明治以降百年間かかって発達したこれまでの文明は、これからの五十年くらいで達成されるだろうと言われていますが、全くその通りだと思えます。もちろん、今後五十年くらいで達成される文明は、更に短い二十年くらいで達成されると思えます。それは、これまで蓄積されたあらゆる文明社会の諸要素が関連して次の文明社会を発展させる力となり、次の文明を高めるからです。しかしこの加速度性はやがて、人為的に衰えさせなければなりません。その理由は、現代の加速度性は人間がついていけないほどテンポの速いものになりつつありますが、このままでいけばたちまち、日本ばかりでなく世界のあらゆる国々においてもいろいろな問題が生じて、文明社会全体の最悪の危機が訪れるからです。それで人類は必然的に世界的規模における人口抑制を始めとする完全な文明の均衡政策をとる必要に迫られますが、その政策が実施されれば文明社会の加速度性は、あたかも空(カラ)の湖に大雨によって水が満たされる時、濁流のごとき勢いで流れ込み、満たされれば洋々として女性的に緩慢となるように、人々はまた、そのテンポについていけるようになります。文明社会の加速度性は、人類によって、このようにリードされなければなりません。

第二は、文明社会は進化すればするほどあらゆる分野が分業化、専門化し、独立性をもち、放射線状に発展しようとする事です。それは文明社会進化のために必要なことで、大いにそう発展させるべきです。しかし、ただ放射線状にばかり発展させ得ても、それを総合化させて人類の幸福に役立て得なければ、あまり意味がありません。今日は、あまり意味のない方を選んでいます。それはなぜかと言いますと、哲学者の怠慢からきていると思います。ここで序ですが、哲学者の使命について私なりの考えを述べてみましょう。哲学者はいつの時代にも文明社会の先頭に立つ頭脳の大リーダーでなければならないと思います。少なくとも昔はそうでした。それが正しい姿であると思います。今日の哲学者は社会の複雑さから自己の本来の使命を忘れ、評論家的になっています。決して哲学者は諸学者らに自分の守備範囲をあげ渡し、何もやる事がなくなったのではありません。かえって大きな使命が文明社会の進化に併行して与えられていることを自覚しなければならないと思います。それは、哲学は本来、諸学の方法論として諸学の基礎にあるべきものであり、そして諸学はその方法論の上で真理の探究がなされるべき関係にあります。それゆえ、真の哲学者は、そういう方法論を開発して諸学の基礎におき、その上で諸学が研究されるようにすべきです。さらに哲学者は、諸学がその上で正しく研究されているかどうかを指導監督し、その研究の成果が人類の幸福に役立つように工夫する立場にあるからです。哲学者にはこういう大きな使命が文明社会の進化とともに生じていることを忘れてはなりません。この役割を果たす哲学者がいなければ、政治家をはじめ人類はすべて触角的になり、ご都合主義的になり、自分らの進むべき方向を手さぐりでいかなければなりません。今日の文明の危機は正に、そういう文明社会の大指揮者がいないことに原因していると思います。しかしこれまでは不運にも、私がいま述べている文明社会進化の法則をキャッチ出来なかったために、自分らの役割が意識出来なかったのですから、怠慢というより仕方がなかったことと言うべきかも知れません。

社会の変化 社会の拡大は人口増加がある限り、必然性を伴って小社会から大社会へと雪ダルマ式に世界が一つになるまで続きます。可能ならもっと大きくなるようにする必然性は止みませんから、そこで人口抑制を軸とする文明社会の均衡政策をとらなければなりません。それには、それまで発展してきた文明社会の諸要素を元にして行なえばよいと思います。その頃の科学技術は今の我々には想像も出来ないほど進化し、その他すべての分野も皆同様に進化しているはずで、それらのすべてを傾注して人類が永遠に住める計画社会を作るべきであると思います。それは社会全体が狂いのない精密機械的となり、最も完

全な体制の社会へと進むことを意味しますが、それが可能なのは自分らの運命、社会の法則を完全にわきまえ、しっかりした設計図をもって創る社会だからです。以上、私がキャッチした幾つかの文明社会の法則を、その生成過程を辿りながら述べてきましたが、ここでそれを分り易くかいつまんで説明してみましよう。

有限な地球上の原始社会の段階で、人口と食糧のアンバランスが起きると、つまり人口過剰が生じると、その社会は必然的に人々の潜在能力としてある頭脳の駆使を要求し、そして食糧の人為的な生産が始まります。そうすると文明社会は途中で均衡政策をとらない限り、好むと好まざるとに拘らず人口の増加が続く限り世界が一つになるまで、小から大へと社会の拡大を伴いながら無限性をもって進化し始めるのです。これが文明社会進化の基本法則であり、脇役的な法則としては欲望の多様化、体制的社会化、文明の加速度性、放射線的専門化等々が考えられ、それらが相関連してそれぞれの進化と文明社会の進化の必然性を強め、また進化のテンポを速め、高度化を促していくものであるという見方です。

結論として最後に、この法則のもつ意味を述べてみますと、これまで、この法則をキャッチすべくして哲学者はもちろん、誰もキャッチしなかったために、政治家は羅針盤を失った舟のように触角的、ご都合主義的な政治を行なう外なく、国民は迷える羊的でした。しかし、これからは違うと思います。人間社会には自然科学の法則と同様の永遠の法則が働いていて、それによって人間社会は必然性をもって進化してきたということを人類が気づいた以上、これからは人間社会を客観的に誰れも見ることが出来て、過去の間社会の正誤の反省はもちろん、現代の危機を除去し今後の人間社会の設計図を描き、永遠的な社会に向かって不安なく文明社会進化の舵をとることが出来ると思います。このことは、社会科学を自然科学の上におき、物質、機械化文明をコントロールし、人間らしさの回復をも約束させるものであります。この文明社会の指導原理とも言える法則に従って、少し距離をおいて地球を眺めますと、アポロ八号から眺めた地球のように脳裏に写ります。また文明社会の過去、現在、未来も絵のごとく、また一覧表的に見ることが出来ます。しかし、かような文明社会の諸法則をキャッチしたからといっても、このままで直ちにすべての問題が解決出来るというものではありません。まだ法則を見つけたというだけであって、これを本当に生かすためには多くの人々の、また、それぞれの分野の人々に正しく理解され、研究され、適用化が行なわれなければなりません。それがためには全世界をあげて具体的な研究に入ってもらいたいと思います。私のこれまで述べてきた考え方が、もし、文明社会の指導原理として文明社会の過去、現在、未来を正しく見ることに役立ち、真理、不真

理の判断にも役立ち、小は公害問題、大学問題、大は永遠の理想的な世界国家の建設に寄与するならば幸いです。最後に広く各層諸先生方のご批判をお願い致します。

昭和四十四年二月末日 国立仙台病院にて

*

以上が六年前に私が病院で書いた小論であるが、以下、この小論をタタキ台として私が今日主張したいことを、出来るだけ分り易く、一貫性をもたせて述べていきたい。その前に高校時代にふと感じたことから始まった思索の過程と、この本を書いた動機等についてここで述べたなら、読者の理解をなお一層容易にするのではないかと思われるので、先ずそれを述べてみよう。

二、思索の始まりと過程

今から二十四年も前の昭和二十六年のことである。私はその時高校三年生で、毎日自転車で生家(宮城県涌谷町)から約六キロ離れた高等学校へ通っていたが、その自転車で通学中のある日のこと、今考えても実に珍奇な疑問をふと抱いた。それは“なぜ泥棒は悪いのか”(私には泥棒の経験がないことを断わっておく)という、ある意味では大変な哲学的命題でもあった。この疑問はたちまち私を虜にし、私の一生をも支配することになったのである。その時から私の自己問答が始まり、今でも終わっていないのである。ニュートンの哲学はリンゴの落下から始まったと言われるが、私の哲学は泥棒から始まった。その自己問答の一端を順を追って述べてみよう。

私は人間の泥棒行為について最初からそれほど難しく考えないで、先ず動物の世界を考えてみた。動物の食事をする時の行為を観ていると、よく、人間の泥棒行為に相当する行為が見受けられる。例えば、牛を二頭並べて別々の容器に餌を入れて食べさせている場合に、仮に強い牛の方が先に食べ終り、そしてまだ満腹でないとする、必ずといってよいほど、隣の弱い牛の餌を強奪して食べてしまう行為が観られる。こういう行為は豚や鶏、犬、猫等の間にも観られるし、また同種の間においてばかりでなく、異種同士の間においても観

られる。そればかりか、弱い動物でも常にチャンスさえあれば大胆にも強い動物の餌を盗み食いしようとする。テレビ等で野生の動物の映画を観ていると、強い動物の餌を弱い動物が盗む場面が上映されることがある。例をあげると、ライオンが鹿を倒して食べていると、何匹かのコヨーテがその鹿の肉の臭いを嗅ぎつけて集まり、盗んで食べようとチャンスを窺ってライオンの廻りをうろうろしている。それを知って頭にきたライオンが、コヨーテを少し遠くまで追いはらう。ところが帰ってみると今度は木の上からハゲ鷹の群れが舞い降りて、鹿の肉を盗み食いしている。それを見ていよいよ頭にきたライオンが、飛び上がる何羽かのハゲ鷹に飛びかかっていると、まい戻ったコヨーテがご馳走を頂いているという場面である。

以上のように見てくると、動物の泥棒行為は日常茶飯事的であると結論づけることが出来る。では、原始時代の原始人たちの間においてはどうだったろうか。大半の動物にもあり、現代人の間にもありながら、原始人たちの間にだけなかったと想像するのはかえって不自然であり、あったと見るのが自然である。盗品は、時には食糧であったろうし、また、時には狩猟採集用具だったかも知れない。こう考えてみると、泥棒という行為そのものは、人間を含めて動物大半の習性と考えられる。この泥棒行為は悪いことかという、弱肉強食の一種で、自然の理(生存の理)にかなっている行為ゆえに、本質的に悪いとは言えない。動物同士の間で泥棒行為にブレーキをかけている要因は、悪の意識ではなく、相手の低抗や逆襲が怖いという感情であろう。我々の先祖である原始人たちにもこれに似た感情が支配していて、泥棒行為防止の歯止めになっていたに違いない。要するに、動物や原始人の間でも泥棒行為を無制限に許し合ってはいないが、それは悪いという意識による規制ではないということである。泥棒行為を悪いと認め合い、意識で規制しているのは文明人だけである。この悪の意識は、道徳心、法律、制度等から発するもので、文明人特有の意識であるというように、私は自分に答えた。しかし、次々と疑問が起こってきて問答は止むことはなかった。続けて述べよう。では、なぜ文明人だけが、法律制度を作り、自らを規制し、本質的には悪いとも言えない泥棒行為を悪として否定し、取り締まることまでしなければならぬのか。文明社会の最も大きな特徴は、人口が多いということである。狭いところに沢山の人間が無秩序に住もうとしても、人間はもともと感情の動物であるから、互いに圧力を感じ合い、なかなか仲良く、そして安心して暮してはいけない。そこで、みんなが仲良く暮していくためには、どうしても数多くのルール、約束ごと等が必要になってくる。そのような次第で今日の無数の法律、制度が文明社会の要求から生まれたものであ

り、泥棒行為を悪として取り締まるのも文明社会の秩序維持の一環として生まれたものと言える、と自答した。

この頃から思索は泥棒の問題を離れ、文明の問題、人口問題、食糧問題等に移って、さらに深く幅広いものとなった。しかし、それらの問答は高校を卒業するまでは、ただ意識の底の方で繰り返していたに過ぎなかったが、大学に入ってから熱病にとりつかれたように一層本格的なものとなり、あらゆる分野の本を片っぱしから読んだり、ほとんどの教授と討論したりして、大学の四年間はそのことだけを夢中になって研究した。人口に重点をおいて思索していたので、何人かの学生からはマルサスの愛弟子と呼ばれたりもした(しかし、私は自然や歴史を師として思索していたので、マルサスを深くは知らない)。その後、問答はどのように展開したか。長過ぎて、ここで全部は述べ切れない。そこで、それからどういう自問が次々と起こったかを述べることによって、私の考えがどんなものが理解出来ると思われるので、自問の方だけを続けて述べることにする。

なぜ人類は原始社会からそのような文明社会へ移行したのか。しかも、人類の歴史約二百万年もある中で、ただの約一万年前になって、あたかも思いついたように。それは人類が望んで計画的に移行したのか、それとも、何か必然の力によってか。いくら考えても、原始時代の人間が望んで文明化したとは考えにくい。しからば、必然力によってと考える他はないが、そこには一体どんな必然力があつたのか。社会は人口によって成り立つが、この人口とその必然力が関係あつたのか。一体、原始時代の人々はどんな生活をしていたのか。原始時代の生活は狩猟採集経済によっていたとすると、食糧は充分だったろうか。そこには人口過剰がなかったか。しかし、仮に、そこに人口過剰があつたとしても、それがどうして文明化への必然力となるのか、というように、次々と自問が起こり思索をした。これらの問いに対して自分独りでどこまでも思索して行かなければならなかったのは、これらの問いに対する答が世界のどこにもなかったからである。そして、さらに人間とは一体何か、どのようにして発生したのか、自然と人間との関係はいかなるものか、自然と宇宙との関係はいかなるものか、宇宙とは何か、という誰れでも考えるような思索もした。そして遂に、人類は人口、食糧、頭脳という三つの要素によって必然的に文明化したことを認識した。そして、これらの要素がその後、文明化した社会の拡大発展の原動力と行き詰まりの原因として働くことも認識した。

昭和二十七年から三十一年までの大学の四年間は全く悔いのない四年間だったと思っている。もちろん、その後の思索によって私の認識は、さらに深まり、広がっていることは

言うまでもない。しかし、それらのほとんどは大学時代に捉えた認識の延長線上の認識に過ぎない。私は偶然にも大学時代にすでに一生徴動だもしない、いや、人類永遠化のためにはなくてはならない論理の基本を認識し終っていたと言える。そのかわり専攻の科目の勉強は余りしなかった。

これまで簡単に思索の跡をたどったわけであるが、このことによって私がどのような見方、考え方をしているかが大体理解出来たと思う。さらに次の「この本を書いた動機」の項を読まれるとなお一層理解出来るものと思われる。

三、本稿執筆の決意と動機

大学時代に、いつも私の研究に関心をもっていた故西村達夫教授(経済学)は、私が四年の時、私を研究室に呼び、学者になって更に研究した後発表することを勧めてくれた。しかし私は次のように述べて先生の勧めを断わった。

「私の認識した論理は文明社会発展の法則とも言うべきものですが、それは文明社会の中に存在としてあるものですから、思想ではなく真理と言えるものだと思います。真理というものは誰れにでも捉えられる関係にあるものですから、恐らく二、三十年内に、社会を研究している専門の学者の誰れかによって、きっと捉えられるでしょう。私は学者よりも実業家になりたいという希望をもっています。ですから、これは専門の学者にまかせておきたいと思います。」

大学を卒業してから私は、言葉の通り実業家になった。それは昭和三十一年のことである。その後私は、実社会の中に生きながら社会の動きを静かに観察した。そこで私は、年々社会のテンポが速くなり、それに比例するようにあらゆるものが多様化し、複雑化していく傾向を見た。同時に、各種の公害、交通事故、自然破壊、人間疎外化が起こっていく傾向も見た。そして、その原因は大発展している科学技術と産業経済が無秩序に結びついて、もの凄い勢いで社会を押し上げているためであるということも知った。こういう社会状況にありながら、社会を研究している哲学者、社会学者たちの中からは社会を総合的に捉えた論理が提言されなかった。そのため政治家は、この社会をどう捉えてどう運営したらいいかが分らず、後手政治に終始するようになったし、人々の思考も百人百様のとなり、

悪循環するようになってきた。ここに、当然起こるべくして各種の市民運動、学生運動が起こり、世の中はますます騒然としてきた。そして、真の哲学の台頭が叫ばれたのだが、それに誰れも答えなかった。出たのは楽観主義的未来論と終末論、警鐘論などばかりであった。しかも、これらの傾向は日本ばかりでなく、全世界的な傾向として現われてきた。この期に及んでも、かつて私が、二、三十年先に専門の学者の誰れかによってきっと捉えられるだろうと予想していたようには文明社会の論理は誰れにも捉えられなかった。それはとも角として、私は、私の認識した論理がその呼びかけに期待通りに答え得る唯一の哲学であることを知っていた。それだけに、かような現実の社会を見ていて独り気をもんでいたのであるが、事業が忙しい上に文章に自信がなかったので、簡単には本にして発表することは出来なかった。そうしているうちに、昭和四十四年の一月に病気で国立仙台病院に入院したため書く機会に恵まれてその一端を書き著わし、百余人に送ることができた。それが前述の論文である。それに対する貴重なご意見、ご批評を十数人の方々からいただいてから私は次のように考えた。

「私が今、会社経営などに熱中しているのは間違っている。人類が今一番求めている論理を知っているものの義務として、それをさらに本格的に研究して、一冊の本に著わして公表すべき立場にある」と。

その後、私は研究と執筆に打ち込む時間が欲しいために会社の経営を止めて頑張っているが、会社を解散する時の挨拶状の中に当時の心情、決意の一端が窺えるので、それを抜粋して紹介すると、

「・・・私は学生時代にある哲学的発見をしました。それはそのまま新しい社会科学の方法論となるものであり、私はその新しい社会科学を誕生させ、発展させることが今日の文明の歪みや危機的状況の解消はもとより、永遠の人類の平和と幸福に最大級に寄与するものと確信し・・・」

以上のような背景、決意等が動機となってこの本を書くことになったのである。しかし、決意して書いてきたこの六年間は、素人で執筆に不慣れな私にとっては大変な六年間であった。人類の社会ばかりでなく地球生態系、宇宙、これらをどう論理的に一貫性をもたせて、しかも分り易く書くかという構想にだけでも延にして何百日もかかった。また、内容が内容だけに各種の本や資料を見て、いろんなヒントを得なければならなかったと同時に、一人でどこまでも思索していかなければならなかったから苦しかった。肩はこり、頭痛はし、スランプ状態にも陥り、精神的にも肉体的にも限界症状を呈したことは何度もあ

った。この苦勞を終始見ていた妻は、学者でもない私が書く必要がなくなるように誰れかが早く同じ論理を発表してくれれば良いのに、と何度も独り言を言っていた。そういう妻を逆に慰め励まして今日まで自分を強く支えてきたものは精神力であるが、具体的には挨拶状の中でも述べていたような溢れるばかりの希望と確信であった。